



責任編集 平野謙 蔵原惟人
小田切秀雄 野間宏 竹内好

日本加列了文学大系

1

運動擡頭の時代

社会主義文学から「種蒔く人」廃刊まで

三一書房

日本プロレタリア文学大系 1 定価二〇〇円

一九五五年一月三十一日第一版発行
一九六九年一月十五日第四刷発行

編者代表 野間 宏

発行者 竹村 一

発行所 株式会社 三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九
電話東京(二九一)三二三一、五
振替東京 八四一六〇番

郵便番号 一〇一

印刷 文栄印刷株式会社
製本 有限会社 佐伯製本所

落丁・乱丁本はおとりかえします

第一卷

「運動抬頭の時代」

凡 例

一、収載作品はできるかぎり初出の新聞・雑誌によつて校合した。ただし仮名づかいはすべて新カナに改め、伏字はおおむねものとそのままとした。

二、収載作品の配列は、小説・戯曲、評論、詩・詩論、短歌、俳句の各文学ジャンル別にしたがった。無署名のアピールなどは資料として評論の部に編入した。

三、各ジャンル内の収載作品は、原則として発表年月順によつたが、ときに執筆年月によつて配列した場合もある。

四、短歌・俳句の作品選定は、各巻をとおして、渡辺順三、栗林一石路の両氏に協力をあおいだ。

第一卷目次

I 小説

坑夫	宮島資夫	三
転機	伊藤野枝	五
労働者誘拐	江口 渙	八五
玩具の閃き	丹 潔	一九
馬鹿野郎!	中村 星湖	二四
空想の花	上 司 小 劍	一九
牢から出た男	平 沢 計 七	一三
赤毛の子	平 沢 計 七	一四
馬を洗う	内 藤 辰 雄	一八
放浪者富蔵	宮 地 嘉 六	一三
坑夫の夢	新 井 紀 一	一七
国境の夜	秋 田 雨 雀	二〇三

眼	金子洋文	三八
雄阿寒おろし	神近市子	三〇
光を掲ぐる者	荒畑寒村	三九
或る機械	細井和喜蔵	三六
ある体操教師の死	藤森成吉	四三
死滅する村	小川未明	五〇
火事の夜まで	今野賢三	六二
特種事件と支社長	山田清三郎	七二
種蒔き雑記	金子洋文その他	七八

II 評 論

新しき世界の為めの新しき芸術	大杉 榮	二九三
民衆芸術の出発点とその目標	加藤 一夫	三〇四
『労働問題』自序	平沢 計七	三〇
民主的文芸の本質と使命	白鳥 省吾	三〇
社会的文学に就て	馬場 孤蝶	三二
思想家に訴う（「種蒔く人」創刊号）		三三
宣言編集後記（「種蒔く人」創刊号）		三一

労働文学の主張	宮島資夫	三五
宣言一つ	有島武郎	三一
階級芸術の問題	片上 伸	三五
芸術運動に於ける共同戦線	小牧近江	三八
文芸運動と労働運動	平林初之輔	三〇
コムレードの芸術	青野季吉	三五
階級闘争と芸術運動	青野季吉	三五
文壇の政党化を難ず	前田河広一郎	三五

III 詩・短歌・俳句

詩

殺戮の殿堂	白鳥省吾	三五
五月、苦悩の日	富田 硯花	三六
或る淫売婦におくる詩	山村暮鳥	三七
ローザ・ルクセンブルグ嬢を懷う	正富汪洋	三九
五月祭の朝	百田宗治	七一
疲れたるものの心理	壺井繁治	七二
紙 屑	壺井繁治	七三

『どん底で歌う』Ⅰ

根岸 正吉……………三七三

『どん底で歌う』Ⅱ

伊藤 公敬……………三七六

群衆の中に……………

萩原恭次郎……………三七八

ラスコーリニコフ……………

萩原恭次郎……………三七九

争議の翌日……………

賀川 豊彦……………三八〇

選挙の後……………

賀川 豊彦……………三八一

浴泉の恋……………

白鳥 省吾……………三八一

一 月……………

百田 宗治……………三八二

エロシェンコに送る……………

加藤 一夫……………三八三

『種蒔く人』創刊号の詩全部……………

福田 正夫……………三八五

白鳥 省吾……………三八七

松本 淳三……………三八八

戦争はよくない……………

武者小路実篤……………三八〇

杜 鵑……………

木下 圭太郎……………三八〇

先 驅 者……………

中山 啓……………三八一

雪の線路を歩いて……………

後藤謙太郎……………三八三

短 歌

真鍮粉 その他……………

松倉 米吉……………三八四

そ の 他……………

土岐 善磨……………三八五

身辺 觸 目……………	西 村 陽 吉……………
労働者の群より……………	三 谷 敬 六……………
我が働ける砲兵工廠にて歌う……………	広 田 健 次……………
工 場 の 歌……………	佐 柳 破 葉……………
激 せ し 心……………	花 田 世 大……………
波 止 場 人 足……………	伊 藤 公 敬……………
無 産 者……………	西 川 百 子……………
女 工 の 歌……………	里 井 柳 枝……………
石川島造船所にて……………	高 野 藤 太 郎……………
『現代国語歌選』より……………	後 藤 史 郎……………

秋田としみつ……………	四〇二
徳田英夫……………	四〇一
伊藤公敬……………	四〇一
森田草一……………	四〇一
後藤史郎……………	四〇一
高野藤太郎……………	四〇一
里井柳枝……………	四〇〇
西川百子……………	三九九
伊藤公敬……………	三九八
花田世大……………	三九八
佐柳破葉……………	三九七
広田健次……………	三九七
三谷敬六……………	三九六
西村陽吉……………	三九五

俳 句

官林董哉……………	四〇三
山上正義……………	四〇四

解 年

説 表

社会主義文学から「種蒔く人」廃刊まで……………	小田切秀雄……………	四〇五
(一九一六年—一九二三年)……………	日本近代文学研究所編……………	四三三

I
小
説

坑 夫

宮 島 資 夫

一

涯しない蒼空から流れている春の日は、常陸の奥に連る山々をも、同じいように温め照らしていた。物憂く長い冬の眠りから覚めた木々の葉は、赤子の手のようなふくよかな身体を、空に向けて勢よく伸していた。いたずらな春風が時折そつとその柔い肌をこそぐつて通ると、若葉はキラキラと音もたてずに笑った。谷間には鶯や時鳥の狂わしく鳴き渡る声が充ちていた。

池井鉱山二号飯場づきの坑夫石井金次は、その日いつものように闇黒な坑内で働いていた。皮がむけて、あざれた骨のようになった松の木で囲った坑口が、凡ての熱も光も吸い取って了っているの、山の肉を割き骨を剥いて切り込んだ洞の奥には、永遠に動かない黒い冷たい闇が一杯にこもっていた。岩の裂目にかけたカンテラの、赤ずんだ弱

い光が、生々しく破られた岩肌や、汚れた仕事衣を着て立っている石井の姿を僅かに照らし出している計りであった。

カンテラは絶え間なく石油臭い油煙をたてていた。行き詰った、風通しの悪い洞窟の奥には、むせるようなダイナマイトの煙が、黒い油煙に交って、人の血を乱す荒々しい匂が濃々とこもっている。

日の輝く世界と全くかけ離れたそこには、外界で起る如何なる物音も更に伝わらなかつた。死のような闇黒と静寂の境で、石井が振う鋼の鉋の牙えた響が岩壁を唸って行く絶え間には、山肌から滴る水の噎り泣くような音も聞えていた。

彼れは泥水で地肌もわからない程汚れた仕事衣を身に纏って、腰には蕤で造った四角な尻当をぶら下げていた。長く伸びた髪の毛を鉢巻で額に止めていたが、蒼白い顔のせまつた眉の下で蛇のように光る目と、少し曲げて結んだ口が、彼の性格の何物かを語っているようであつた。

彼の前には刳られた山の肉の断面が立っている。赤黒い母岩を貫いて走っている真白い筋のような、稍傾斜した硃石の脈の中には、オルフラマイトが石炭のように黒く光っていた。真鍮色の硫化鉄や金色の銅、緑の鮮やかな孔雀石も鑲んでいる。小さな剣を植えたような透明六方石のスカリは、所々に氷のような光を放っていた。カンテラの焰がゆらめくと樋の内は仏壇のように美しく輝いた。

山はダイナマイトをかけられる毎に、大きな身体をもたえて苦しげに呻いた。が、石井にはその轟然とした凄まじい音響と共に、鉄のような堅岩も微塵に粉碎されるのが、日毎に味う限らない快感であった。彼れは又何万年とも知れぬ昔から、何物にも触れた事のない山の肉を、自分の持つ鑿の刃先で一鎚毎に撃いて行く快さをも貪り味っていた。鑿を持った左の腕を真直ぐに伸して、反身にした身体を半ば開いて、右に持った鉄鎚を遠くから勢こめて打ち下すと鑿の頭からは火花が散って、岩に切り込む刃先からは目に見えぬ何物かが、手から腕へやがて全身に伝わるように覚えるのであった。びちよびちよと血のように赤い冷たい水の滴る坑内でも、彼は汗をかいていた。

彼はその時朝から三度目の爆発穴を削っていた。三尺近い鉄の鑿はもう五六寸しか岩の外に現われていなかった。気の乗った彼の目には、盃のようにひしゃげた鑿の頭より外は、何物も映らなかつた。尻当は腰の辺りで、妙な調子を取ってゆれていた。

石井の切り出した岩片を一輪車に積んで、坑外に運んでいた掘子の三吉は、岩片を出し終ってから、少し離れた彼の後に一輪車に腰をかけて、呑気らしく鉦山歌を謳った。単調な歌の音は激しく打ち合う鉄の響に和して、トンネルの闇の中を異様な声で唸って行つた。

穴を削り終ってから石井は、細長い爆発薬に雷管と導火線を装置して押し込んで、息の洩れないように丹念に細い

岩片を詰めて、やつと額の手拭をといて汗をふいた。襟のあたりから微かに立つ湯気が、カンテラの焰に白く映つた。彼れは振り返って三吉に、

「もう午かな」と聞いた。

「まだ鈴は鳴らねえけど、もう午でやすべえ」と三吉は待ち設けたように答えた。三吉は早く此の暗い冷たい坑から出たいと思つてゐた。温かな目を浴びながら乾いた砂の上に転がって、午休みの選鉱女にからかう楽しさを思い詰めていたのであった。

石井は黙ってカンテラの焰をかざして、導火線に火を点けた。白い繩はシュッシュと音をたてて、闇の中に赤い火花を散らして燃え込んでいった。新しい煙硝の臭が二人の鼻をついた。

「三吉出よう」と云つて石井は先きに立つた。暗いトンネルを二人は屈むようにして、冷たい水を踏んで歩いた。黒い尾を曳いたカンテラの光が、濡れた岩や水に映った。

二人が坑口を出てからダイナマイトは凄まじい音を立てて爆発した。肉を破られた山は苦しうに大きな身体を震わせて、長く呻いた、前に聳えている山も悲しげに反響した。悲鳴は谷を伝ひ森の木の葉を慄わせて遠く響いて行つた。

石井は坑口の傍の若草の上に転がつて、じつと響の行方を追つてゐたが、響がすっかり消えると彼れの蒼白い頬に微かな笑が浮んだ。側に立つてゐる三吉に

「今の爆発薬は能く利いたなあ」と云った。

「又岩片がうんと出たでやすべえ、石井さんについてると、はあ、全く案が出来ねえだ」と道化顔した三吉は、ジョリンで足下の土を掻きながら云った。

「おれにつくのがいやなら止せ」と石井はすぐ険しい眉をびりつかせた。

「そうら何か云うとじき怒るだから、石井さんにつくのは皆ないやがるだよ、俺あ見張で憎まれてるもんで、毎日石井さんの仕事場にばかりつけられてはあ、やるなるだよ」「野郎っまだ」と石井が半ば身を起した時、三吉は身を翻えして逃げ出した。彼れは追いかけるのも何だか情いので、其儘再び若草の中に身を横たえた。若葉を灑した春の陽が彼の冷えた身体を温め、優しい春風が疲れをいたわるように撫でて通った。

下の方の坑内からも、午の揚り爆発薬をかけた響がいくつも続いて起った。が、響はやがて一つになって、穏かな春の大気を震わせて蒼空の中に拡がり消えた。遠くの選鉱場で女達が謳う、かすかな選鉱節の絶え間に、石を砕く響がどすどすつと断え断えに聞えて来る。水のように蒼く澄んだ空を、銀色の雲が静かに流れていた。彼れは何となく薄ら眠くなった。何時も彼れの心を責めている苛立しい気も消えて、懐かしい夢の世界のような中に、じつと長く浸っていた。

麓の方で午を知らせる鈴がけたたましく鳴った。彼れは眠りから覚めたようにやつと身を起して、丸太で足留をした山道を下って行った。

下の広場に、見張所と鉱量小舎が向き合って立っている傍の、みすばらしい大工小舎が、坑夫の休み場とも大工の仕事場ともなっていた。彼れが下って行った時、鉱量小舎の周りに坑夫等が多勢集まっていた。低い杉皮で蔽われた屋根の下は人垣の影で薄暗くなって、中はよく見えなかった。同じように土で赤く汚れた着物を着て、尻当をぶら下げて、油煙で目鼻の黒くなった坑夫等は「小幡の野郎が悪いんだ」「やつつけちまえ」と殺氣立ったことを、口々に怒号していた。

石井は穏かに静まった気を掻き乱されることを厭わしくも思った。けれども其騒ぎを冷やかに無関心で看過するには、彼れの血は余りに煮え易いものであった。彼れは思い切ったように、歩み寄って、仲間の後ろから中を覗いてみた。鉱石を堆く積んだ傍に係員の小幡が顔の半面を泥と血に滲ませて、真蒼になって立っていた。扉を洩れた陽が切りつけたように傷の上に射している。洋服を着た事務員が三人、眼を光らして附き添うように傍に立っていた。四辺にはバケツや箱箕がだらしなく散らばっていた。

一同の視線は鉱量台の前に集中していた。其処では飯場頭の萩田が、佐藤という若い坑夫の胸倉を捉えて、片手で続けざまに彼の横面を張り飛ばしながら、噛みつくように

怒鳴っていた。

「やい手前は何だってこんな生意氣な真似をしたんだ、不足があるなら何故俺ん所へ云って来ねえ。俺の面を踏み潰しやがったな」

佐藤はまだやつと二十歳になった位の、薄い肩の下に太い刺青をした、生意氣らしい顔をした男であった。萩田に打たれる度にびりびりと身体を震わせるばかりで黙って立っていた。

石井は原因を知りたいと思った。彼れが腕を組んだ儘仲間を押し分けて一番前に進み出ると、其処に立っていた野田という坑夫が

「兄弟好いところへ来た。小幡の野郎が余り判らねえ事をいうもんだから佐藤が怒って横面を蹴飛ばしたんだ、ところが今度は頭が怒っちゃって皆な手がつけれねえで困ってるんだ。何とか止めてやって呉れよ」と佐藤のために懇願するような顔をして言った。

野田の言い草を聞くと、石井は無暗に腹が立った。此間から仲間の間に、鉾量係の鉾石の買方が無理だという苦情の起っていた事も知っていた。年の若い佐藤が皆に煽てられて間違を起したのではないかと思った。利口顔して能く喋舌るこの野田なんか、先きに立って煽てたのだろうと思うと、反感が胸を衝いた。

「お前こそ止めてやんねえな、平常から小幡なんか遣つつけちまわなきゃ駄目だつて言つてたじゃねえか」と言つて

冷笑した。野田は間の悪そうな顔をして黙つて了った。けれども萩田がまだ怒鳴り続けているのを見ると、何となく佐藤が氣の毒になった。腕を組んだまま仲間の群から離れた石井は二人の側に歩み寄った。

「何だか知らねえけど兄貴、もう好い加減にしてやれよ」と言つて、固く捉えている萩田の腕に手をかけた。萩田は逆いもせず素直に手を離して、

「兄弟、兎に角此奴を飯場に引張って行つて呉れ。俺は見張へ行つて話をつけてすぐ行くから」と佐藤を石井に渡した。

「さあ俺と一緒に来ねえ」と言つて石井は佐藤を引いた。佐藤は黙つて小幡の顔を睨みつけてから石井の後に従つた。

事務員等は黙つて見ていた。坑夫達は列を割つて通したが、二人が休み場の方へ道具を取りに行く後から、またぞろぞろ随いて来た。

「小幡の野郎が余り因業だから悪いんだ」

「これで下山かろされちゃ佐藤の兄弟が可哀相だ」とわやわや喋舌つた。それを聞くと石井は又むかむかした。彼れは振り返つて、

「何だ、お前達そんなに佐藤が氣の毒なら佐藤が怒つて小幡を蹴飛ばした時、何故皆して鉾量小舎でも踏み潰しちまわねえんだ」

鋭く光る眼を据えて言い放つた。坑夫達は黙つて二人か